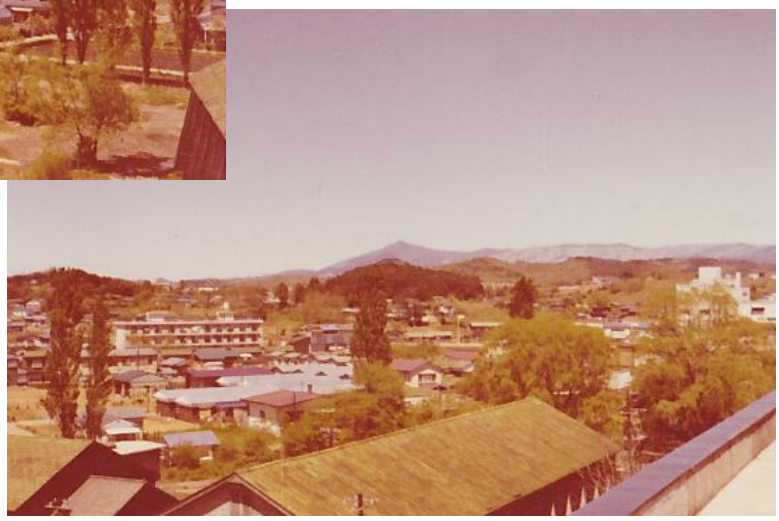
昭和 44 年卒　岩大電気科同期会

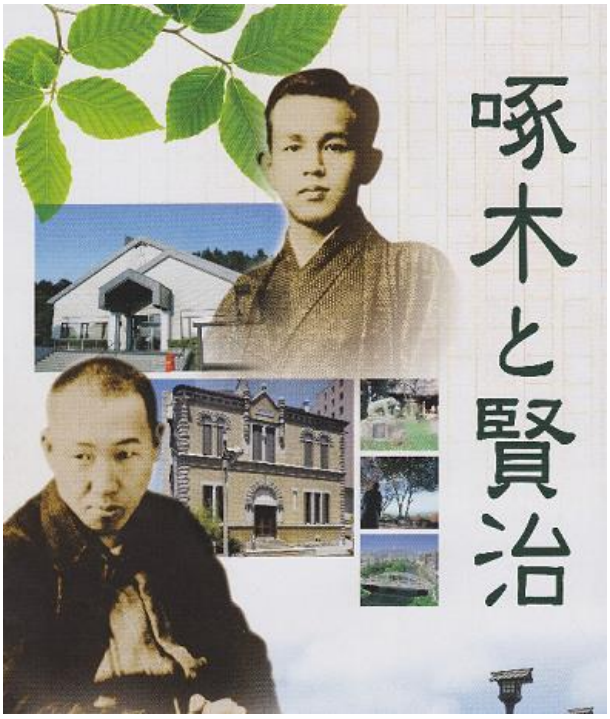
2013 年 9 月 8 日(日)　於:つなぎ温泉

＜　盛岡　啄木と賢治をたずねて　＞

（44 年前の電気科屋上からの岩手山）



（これも 44 年前の電気科屋上からの姫神山）



（啄木没後 101 年）

（賢治没後 80 年）

＜　昭和 44 年卒　岩手大学工学部電気科　同期会　＞

□ 腰痛め正座もあぐらも駄目と言う　先生我慢の集合写真

　隣の大田原先生が、どうも正座が御辛そうに見えたので、幹事さんに“あぐらでもよいか”と問いかけたら、先生が“あぐらも正座も辛いんだ！”とおっしゃった。

自分も含め、集合写真に遅れて申し訳なく思った・・・

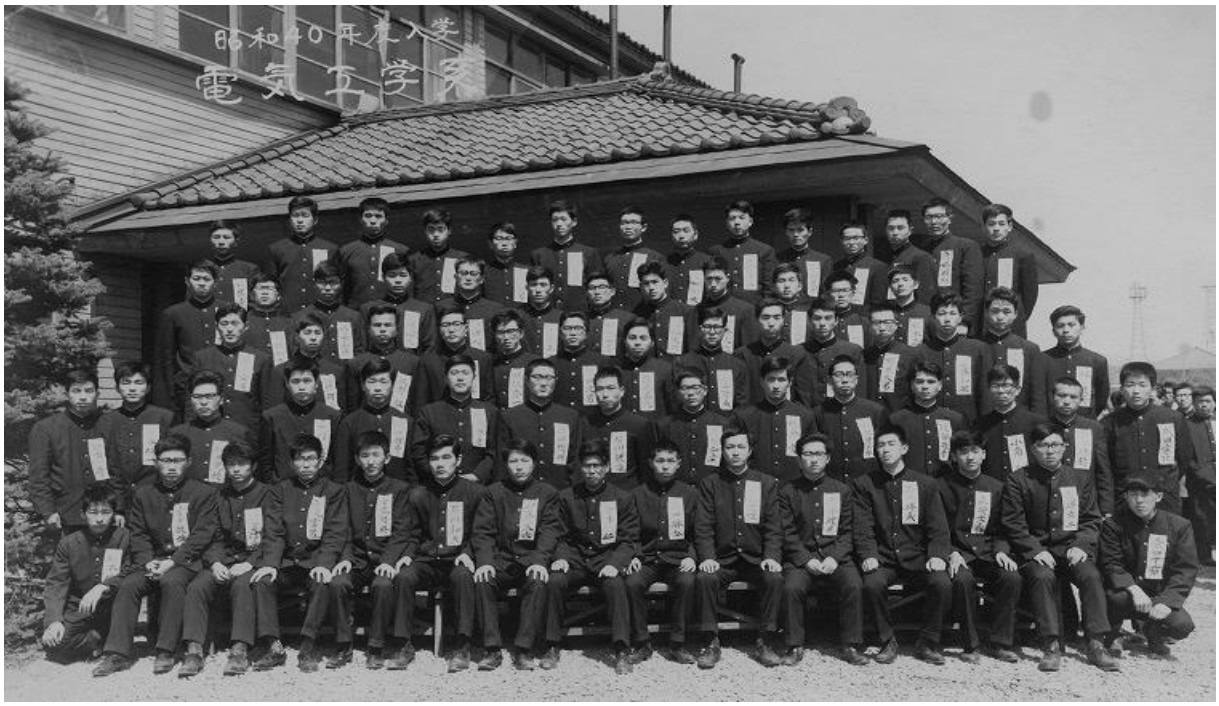
□ 八十路過ぎ壇上で語る先生に　電気回路の講義思い出づ

□ 先生が御挨拶にて語りけり　大学訪ね会えた経緯（いきさつ）

□ 構内で会う人ごとに尋ねども　　四十二年経て知る人もなし

□ 「どちらさま」問われるほどに三人は　　知る人もなく行きつ戻りつ

□ ただ一人知る師ぞ居て訪ぬれば　　学内全て案内いただく



✧　岩大の入学式の写真観て　名前を正すメール飛び交う

□　ウエッブのスカイドライブ・クラウドの　セピア色した写真懐かしむ

□　セピア色の写真に躍る若人は　四十四年後の己を視て居り

□　練り上げし手はず通りの備えして　仲間の到着待ちわびて居り

□　しっかりと挨拶も終え　二次会のカラオ楽し　笑顔溢れむ

□　当日に受け容れられし提案の　コンパニオンとみなが楽しむ

□　盛岡に四十四年経て会いし人　交わす言葉のもどかしきかな

□　花巻で町内会を仕切り居り　目配り気配りアドバイス確か

□　その昔反戦うたいし彼の人が　女心を艶気く歌う

□　友来たり　四十四歳瀬経て恋を語る　信濃の旅路　儚い一夜
□　善光寺　御堂をめぐる暗がりの　手の温もりに覚え有りやと
□　うら若き女事務員懐かしむ　ほろ苦き恋　ほろ苦き酒
□　彼の人は“何処”と問えど　誰ひとり　酒酌み交わす友は知らざり
□　ある友は　下駄を納めに参るらむ　信州信濃の善光寺さま
□　それぞれが　それぞれ抱きし恋ごころ　懺悔に酒を飲みほしにけり

□　二次会で義理に報いる司会せし　汗かきつつも　好きことも有り

□　久し振り訛り懐かし「寅さん」の相撲甚句を静まりて聴く

□　若いころ札幌に居たと言いし人　想いがこもる北国の歌

□　二次会にお酒の好きな友自重　部屋に籠もりて　囲碁打ちにけり

□　若き頃大人しい人と思いきや　時折奇声　デュエット歌う

□　工学を離れて久しいアパレルの　業界に生きて着こなし見事

□　岩大の羽織袴の詩吟部が　リズム軽やかポップス歌う

□　先生の大利根月夜の歌につられ　田舎芝居を真似て踊りぬ

□　岩大の吹奏楽のプレイヤー　初めて聴きし吾が友の歌

□　教壇で鍛えし声の迫力で　南部の国の木挽き唄うたう

□　間を空けずいつでも歌うと言いくれし　どこかで腕上げ朗朗と歌う

□浴衣着にウエストバックしかと締め
　　高音厳しき「古城」を歌えり

□早朝に身支度整えスマホ手に
　　ニュース読んだと自慢げに言い

□試験前に寮によく来し吾が友は
　　テストの山のリサーチがため

□　在学中あまり会話のなき人に　震災のこと夜更けまで聴く

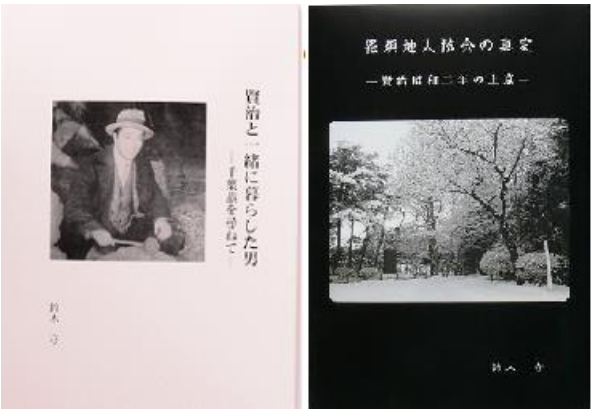
□　歌う曲定まらぬ人函館の　選曲端末　持ちて離さず

□　東京五輪　決まりし宵のカラオケの　次会を予感さす「北の旅人」

□「何号車？」と問えばすでに盛岡の人　下宿訪ねて夕顔瀬橋

□　大学の電気実験のレポートは　彼が頼りと言う人の居て

□　友語る　小窓の向こうの彼の人と　求人に来て言葉交わせし



□　一高で数学教えし友の著書　賢治が謎を解き明かしゆく

□克明な同期の写真のアルバムの
　　花と景色が心和ます

□写真集　いつも同期のカメラマン
　　姿は中々探し当たらず

□思い立ち時折旅に出ると言う
　　友の写真を思い描きぬ

□　バスケ部で鍛えし身体今もなお　すらりと高く手足しなやか

□　同期会　妻と連れ立ち盛岡の　微笑ましきかなオシドリの旅

□　ワンゲルで歩いた足に自信あり　陣屋をめぐり中山道行く

□　近況の写真で綴る散歩道　季節の移ろい連れ立ち歩む

□　出立の集合写真に遅れたり　私が最後！　いやまだ居ました

□　急ぎ立ち　洗濯ものを置き忘れ　着払いでの宅配届きぬ

□　工学部　校門わきの桜木も　四十四年経ち老いた樹で待つ

□　木造の校舎も消えし構内に　最新設備の実験棟建つ

□木造の校舎に響きし下駄の音
　　四十四年経て今は聞こえず

□学内の掲示板観て思い出づ
　　追試に吾が名有りや無やと

□学び舎の隙間風寒し手をさすり
　　人気少ない追試　思い出す

□　吾が職の縁結びける先生の 銅像を拝し謝意をつぶやく

□　腰痛をおして付き添う先生の　昔の話に耳そばだてぬ

□　真新し銀河ホールの壇上で　「三次会やろう」と問いかけてみる

□　板張りの同袍寮は無けれども　寮生集いて写真に納まる

とうなっている　学生寮

1971, 6, 26　夕刊　毎日

雨もり、穴だらけ

ガタガタになる一方

岩手大の場合

□　学内のつたのからまる木の根元　同袍寮碑が名残留める
□　傾きて板壁破れし同袍寮 囲む木々見て瞼に描く
□　ガタゴトと下駄の音響く同袍寮 木のざわめきに賑わい偲ぶ
□　寮祭の最期に集う三百名　大食堂に寮歌の響く
□　部屋ごとに薪運び込み冬備え 空腹のままに蕎麦競い食う
□　上田路の風呂屋を出でしタオル振る 寮に着く間に凍てつきて立つ
□　銀月の梅割飲みて駆け戻る 夜風頬なで人恋うる秋
□　秋の日の渋民村は遠い里ペダルを踏みて啄木めぐる
□　学内に立て看板もビラもなし 若きうたごえ無きぞ淋しき

□　学内のレストランでの昼食に　ビール飲めるとは　夢　思わざり
□　来年は北海道での同期会　暇とお金と身体大事に
□　来年の幹事の話に拍手して　再開誓い帰路に着きけり

＜　盛岡　啄木と賢治をたずねて　＞

・2013 年 9 月 9 日午後　渋民～鶴飼橋～好摩～夜更けの森～宝徳寺～定光寺～岩山
・2013 年 9 月 10 日：　啄木であい道～啄木新婚の家～イーハトーブアベニュー　～
盛岡中学跡界隈～大通り（丸藤）～甲子本店～公会堂～中の橋～上の橋～
天満宮～下の橋～川原橋～御？橋～カワトク百貨店～盛岡城跡～盛岡駅～帰路

□　啄木の書体で綴られた「もりおか」の　秋の陽あびて　駅の名優し
□　「もりおか」は　心地好き響きなり　四十四歳瀬経ち今なお更に

□　故郷に帰る度ごと思い出づ　「ふるさとの山はありがたきかな」
□　盛岡の駅の前にて真向かいし　啄木が歌碑　北向きに座す

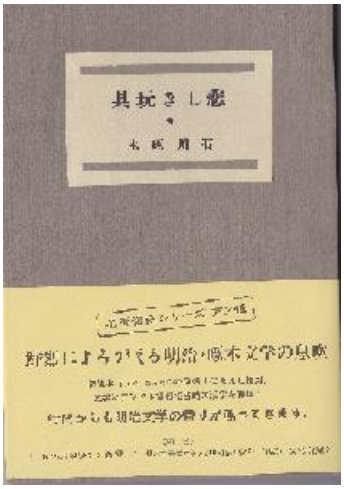
□　渋民の子供と遊ぶ啄木像　教師の頃の山の子思う

□　渋民の小学校の教壇に　教師の頃を思いて立ちぬ

・かにかくに渋民村は恋いしかり　おもいでの山　おもいでの川　　啄木

□　石を持て　追わるる如き　渋民を　愛し続けし啄木愛おし

・石川はえらかったな、と
　おちつけば、
　　しみじみと思うなり、今も。
　　土岐　哀果



□　啄木の借用証文あまた見て　「額より高値」と友呟きぬ
□　復刻版「一握の砂」見つけたり　表紙の筆の勢いを読む

□　姫神の花崗岩をそりに乗せ　賢治も引きし啄木の歌碑

・やわらかに柳あをめる　北上の岸辺目に見ゆ　泣けとごとくに　　啄木

□　北上の鶴飼橋を渡り来る　啄木の下駄　幽かに聞こゆ

□　北上の鶴飼橋のたもとより　風に流るる「柳目に見ゆ」

□　いただきの秋雲去るを待ちわびつつ　鶴飼橋から岩手山眺む

□　好摩駅　夜更けの森の頂に　姫神望む啄木の歌碑

・霧ふかき好摩の原の　停車場の　朝の虫こそ　すずろなりけり　　啄木

□　啄木の望郷そそりし姫神は　没後百年　今も穏やか

□　陽に映えて姫神の峰迫りくる　夜更けの森に名残り蝉啼く

・ふるさとの寺の畔の　ひばの木の　いただきに来て啼きし閑古鳥　　啄木

□　宝徳寺　ヒバに並びし歌碑の傍　いただき仰ぎ　鳥影探す

□　早熟な啄木六つで恋をせし　寺改築の大工の娘に

□　啄木が生まれし寺の大杉の　年輪数え切り株に立つ

□　啄木の産声上げし常光寺　没後百年　大杉見上ぐ

□　岩山の姫神望む啄木に　並びて眺む　夕暮れの街

□　啄木の歌碑が導く詩（うた）の道　胸打つ短歌（うた）に歩み進まず

・友がみなわれよりえらく見ゆる日よ　花を買ひきて　妻としたしむ　　啄木
・わが恋を　はじめて友にうち明けし夜のことなど　思い出づる日　　啄木
・盛岡の中学校の　バルコンの　欄干最一度我を倚らしめ　　啄木

□　啄木の望郷の丘岩山に　指射し辿る思い出の街

私は、工学部見学後みんなと昼食を食べ、「ここはふるさと　旅するラジオ」に心残りでしたが、女鹿さんの案内で FM 放送を聴きながら渋民村へ向かった。啄木記念館に到着し車の中でラジオを聴いていたら、鈴木さんと篠原さんがやって来て合流した。

ここから車 2 台でのショートツアーが始まり、記念館、渋民小学校、啄木が住んでいた斉藤家を見学し、鶴飼橋の歌碑のまわりを散策した。そこから好摩の夜更けの森に登って姫神山を眺め、引き帰して啄木が幼いころ過ごした宝徳寺に立ち寄った。そこから 10 キロほど離れた啄木誕生の地である常光寺を訪ねた。昔、同袍寮の先輩に連れられて砂利道を自転車に乗って渋民まで来たことはを思い出した。常光寺まで山道を行くのは、自転車ではとても無理だとあきらめていた。

最終地は盛岡の岩山に登り、啄木の歌碑や夕暮れ迫る街並みと岩手山を眺望することができた。

女鹿さん、鈴木さん、篠原さん、お世話になりました。ありがとうございます・・・

□　「啄木であいの道」は北上の　開運橋から朝日橋まで

・汽車の窓　はるかに北にふるさとの山見え来れば　襟を正すも　　啄木

・今日もまた胸に痛みあり　死ぬならば　ふるさとに行きて死なむと思ふ　　啄木

□　北上の川沿いの木陰　歩みゆく　啄木の短歌（うた）に心慰む

□　胸痛み故郷（くに）で死なむと望郷の　想いとげしや歌碑立ち並ぶ

□　啄木の新婚の家のスタンプの　押れに圧され　縁丸まりぬ

□　啄木の小さな机で描かれし　大いなる夢「小天地」かな

□　この家のボランティアせし先輩が　地図に示したイーハトーブ通り

[　材木町　イーハトーブ･アベニュー　]

□　材木町賢治が坐像に手を伸べて　頬を撫でゆく　清し女（すがしめ）を見ゆ

□　盛岡の賢治がセロのレプリカに　イーハトーブの秋風を聴く

□　アベニューの星座のオブジェ眺むれば　賢治が歌う「星めぐりのうた」

□　朝ドラの北三陸の“あまちゃん”に　静かに流れる　星めぐりのうた

□　法華経を訳して配れと遺言し　肥料の相談　息絶ゆるまで

岩手山のご加護に謝する石灯籠　夕顔瀬橋を見続けて居り

□　壬生義士伝　夕顔瀬橋を渡り行く　雫石は「しづ」が古里

□　「丸藤」の十五の心の啄木像　行き交う人に何を語りけむ

□当時る店員の居て話しける
　　岩大生のコンパのことなど

□薄暗き二階の広間飲み会の
　　「甲子本店」今は食堂

・学校の図書館の裏の秋の草　黄なる花咲し　今も名知らず　　啄木

□盛岡の日赤裏の路地の角
　　看板「ひさご」が女将を思わしむ

□寒む夜更け同袍寮にドサドサと
　　「ひさご」の女将がストームに来たり

□　盛岡の桜は石を割って咲く　南部の武士の魂と聞く

□　原敬が傍で見て居た公会堂　四十四年経ち存続問わる
□　盛岡の公会堂前に立ちて思い出づ　腕組み歌いし山ばとのうた
□　大学祭発表のステージ公会堂　思い出のシーン瞼に浮かぶ

□　啄木が逝く前年に建てられし　レンガ造りも色褪せず経つ

□　城下町の面影残す町並みの　商家に並ぶ竹ぼうきかな
□　上の橋たもとのそば屋　今いずこ　競いて食べし　そば四十六杯
□　街角のベンチの側にチラシ有り　「もりおかの短歌（うた）」募りておりぬ

□　啄木の愛でし擬宝珠の上の橋　中津の川面に思い出揺らぐ

・病ごと　思郷のこころ湧く日なり　目に青空の煙かなしも　　啄木

・松の風夜昼ひびきぬ　人訪わぬ山の祠の　石馬の耳に　　啄木

・夏木立中の社の石馬も　汗する日なり　君をゆめみむ　　啄木

□　天満宮　啄木も撫でし狛犬を　吾も撫でつつ岩手山望む

□　願いきく南部の牛に拝礼し　牛追い唄を小声で歌う

□　啄木の最期看取りし牧水の　歌碑を尋ねて下の橋まで

□　下の橋たもとに湧き出づ　賢治清水　中津川背に喉潤せり

□　啄木の友情の証し牧水の　歌碑を尋ねて中津川下る
□　牧水の歌碑を探して川原橋　虚しく眺む中津川かなら
□　川原橋渡りしところ中学に　歌碑ありと知るや車窓の中で

・不来方のお城の草に寝ころびて　空に吸はれし　十五の心　　啄木

□　初恋の十五の心思い出し　「勿忘草をあなたに」歌う
□　啄木の「窓より逃げて…」吾もまた十五の頃の同じ思い出
□　中学を中退せし啄木の　「バルコン…」の短歌（うた）に後悔滲む
□　その昔大学祭のフィナーレの　城跡広場のキャンプファイヤー

□　風鈴を微かに揺らす秋風に　想いを残す旅戻りかな

「　旅　の　記　憶　」

ー　同期会　啄木と賢治を訪ねて　ー

2013 年 9 月 8 日に岩大電気科 44 年卒の同期会がある。その日が近づくにつれてグループメールのやり取りも活発になって来て、気持ちが高揚してくる自分に気付かされた。今回の同期会で企画された“近況報告”を通して、44 年間の皆さんの活躍の様子も知ることができた。ただ、もう少し多くの方が、この企画に参加してくれたらと少し残念でした・・・

ネットで時刻表を調べてみたら、熊谷から盛岡まで、何と、2 時間半ほどで行けることが分かった。44 年前には信じ難い事ではあるが、こんなに近い時間距離なのに、今回の同期会の企画がなければ、まだまだ再盛は実現しなかった。同期会を企画し、計画を実行に移してくださった幹事の皆さんに感謝申し上げます。特に地元の幹事の皆さんには、具体的なご苦労をおかけしました。ありがとうございました。

この度も悪い癖で、下手な備忘録短歌を作ってみましたが、小南の勝手な思い込みで作っておりますので、ご無礼な表現には、どうぞご寛容なご理解とご了解をお願い申し上げます。またスカイドライヴにアップされた写真も無断でコピーさせていただいた事も合わせてご了承ください。

橋本さん、宮手さん、篠原さん、綺麗な写真をありがとうございます。

当日 8 日は、少し早めに昼食の準備を整え、熊谷発 13：01 の新幹線“たにがわ”に乗り、大宮で 13：22 の“はやて”に乗り換えた。その時、大川さんに電話したら 9 号車に乗っているとのことで、続いて太田さんに確認したら、既に盛岡の街を夕顔瀬橋に向かっているとの返答であった。

盛岡には 15：22 に到着し、同じ列車に乗っていた大川さんと合流した。二人で案内の資料に従って駅の西口に出て驚いた。そこにはまるで新しいタウンができていて、昔を思うと信じ難い景色でたった。そこに石川さんが現れて、シャトルバスの停留所を探してロータリーを歩いていると、一人、二人と仲間が集まってきた。駅に近い端の方に“愛眞館”のマイクロバスを見つけて乗り込んだ。

16 時 7，8 人の仲間と会場のあるつなぎ温泉に向かった。このバスの中で篠原さんが、越谷市で発生した竜巻に遭遇した時の話をしてくれた。その時は車のワイパーは全く効かず、身の危険を感じてコンクリートの頑丈な駐車場のあるスパーに逃げ込んだそうである。スパーは既に停電になっており、暗がりの中店員総出で商品の見張りをしていたそうであるが、どこかの国のような略奪騒ぎ起きなかったと言っていた。我が国は、まだまだ安全・安心な国なのかと改めて安堵した。

（　同期会が終わった 15 日に熊谷にも竜巻がやってきた。
　メールや電話でご心配いただきありがとうございました。
　　□　熊谷に竜巻が来て豪雨きて　いじめ続けし地球の怒り
　　□　熊谷に竜巻が来て嵐去り　瓦礫を照らす秋の陽哀し　　）

今度の同期会では、二次会の司会をやることになってしまった。これも 2 年前の大沢温泉の同期会のとき、大浴場で“パンツ強奪未遂事件”を起こしてしまいましたが、原告が訴訟を撤回してくれたので推定無罪となりました。今回、2 次会の司会役の原告が参加できなかったので、止む無く司会を引き受けることになった。でも、深酒をせずに済みましたので、飛世さんに感謝しております。

楽しい宴会の翌日、工学部見学後みんなと昼食を食べ、「ここはふるさと　旅するラジオ」に心

残りでしたが、女鹿さんの案内で FM 放送を聴きながら渋民村へ向かった。啄木記念館に到着し車の中でラジオを聴いていたら、鈴木さんと篠原さんがやって来て合流した。

ここから車 2 台でのショートツアーが始まり、記念館、渋民小学校、啄木が住んでいた斉藤家を見学し、鶴飼橋の歌碑のまわりを散策した。そこから好摩の夜更けの森に登って姫神山を眺め、引き帰して啄木が幼いころ過ごした宝徳寺に立ち寄った。そこから 10 キロほど離れた啄木誕生の地である常光寺を訪ねた。昔、同袍寮の先輩に連れられて砂利道を自転車に乗って渋民まで来たことを思い出した。常光寺まで山道を行くのは、自転車ではとても無理だとあきらめていた。
最終地は盛岡の岩山に登り、啄木の歌碑や夕暮れ迫る街並みと岩手山を眺望することができた。

そのあと篠原さんと一緒にホテルまで送ってもらった。ベットに横になったら、昨夜の寝不足もあって、すぅーと眠りこんでしまい 8 時ごろ目が覚めた。それから夕食を求めて夜の盛岡に出かけた。ふらっと歩き出したが、昔の盛岡に比べて激しい電光色に驚かされながらも、知らぬ間に中の橋まで来ていた。中津の川面に揺らぐ街の燈を眺めながら、昔はこんな風に眺めただろうかなどと思いながら、当時のことを思い出していた。帰りはなるべく光の少ない方へと歩いてくと、県庁、県公会堂の所に辿り着いていた。この公会堂の前に立つと大学祭で各クラブの発表会を行い、入場料 100 円で市民の皆さんに観ていただいてことなどが懐かしく思い出された。そして 44 年経った今、この公会堂を保存すべきかどうか、その存続が問題になっていると女鹿さんが言っていたのをふと思い出した。

しばらくその辺りを歩いて、上田通りまで足を延してみようかとも考えたが、夜の街並みでの方向感覚に自信もなかったので、明るい方へと引き帰した。そして映画館通りへとさしかかったが、映画全盛時代の華やかな面影は薄れていて、少しさびしい気がした。そこから一寸した好奇心もあったので裏道通りに入ってみたら、こちらは夜の街盛岡の賑わいであった。少し遠回りをしたが、明るい大通りに出て、元来た通りを駅に向かって引き帰し、女鹿さんに教わっておいた焼肉屋さんで遅い夕食を食べた。生ビールを飲みながら美味しいお肉を焼いて食べ、仕上げは盛岡冷麺を食べた。ホテルまでの道すがら、昔から“冷麺”という食べ物があったかなあ・・・学生の頃に食べた記憶がないな・・・などと考えていた。

翌 10 日朝、バックをコインロッカーに預け、駅の観光案内所に行き“啄木と賢治”に関する資料や地図を貰って、盛岡市内を巡ってみることにした。まず、開運橋のたもとに来ると、“啄木であいの道”という案内板が目にとまった。そこで、北上川に沿ったこの木陰の道を歩いて行くと、啄木と節子の歌碑がぽつりぽつりと建てられていた。自然石に短歌を彫り込み、白ペンキを流し込んだ素朴な歌碑が多く、あまり知られていない短歌もあり楽しませてくれた。この小道は開運橋から朝日橋まで続いており、朝日の木漏れ日の中をゆったりとした時間を過ごさせてくれた。

昔学生だった 44 年前に比べると、市内の案内板は随分と整備されたように感じた。しかし、地図のマークを頼りに実際に歩いてみると、中々目的地にたどり着けないことに気付かされた。44 年前の土地勘は役に立たないものになっていた。ついに、散歩中のご老人に案内されて、最初の目的地の帷子小路の啄木新婚の家に着いた時には 10 時を廻っていた。啄木の家を見学していると、そこに岩大農学部の先輩がボランティアをしていて、材木町の賢治のイーハトーブ・アベニューに行ってみるようにと勧めてくれた。

このアベニューは朝日橋から夕顔瀬橋通りに突き当たるところまで続いており、通りの両側の歩道に賢治ゆかりのオブジェが所々に置かれており、その近くにベンチと灰皿が備えられていた。そのベンチに腰を下ろし、爽やかな秋風に煙を揺らしながら、たばこを一服するなどのどかなひと時を過ごすことができた。当世、喫煙家は肩身の狭い思いをしているが、ここは愛煙家に心地よいところである。夕顔瀬橋から岩手山を眺めたが、今日も山頂に雲がかかっていたのは残念であった。

この通りを戻って材木町の入り口の所のベンチに座り、次は何処へ行こうかと地図を広げて一休みした。そして交差点の信号を渡りしばらく歩いてから、ビニール袋に入れた上着と資料を置き忘れたことに気が付き、慌てて小走りで引き返した。交差点の信号が赤で直ぐには渡れなかったが、ベンチに置き忘れた袋が見えたのでほっとした。信号を渡って袋を手にした時、“盛岡はいい街だ！”結構人通りは結構多いのに忘れ物がそのままだったことに感激してしまった。

そろそろお昼近くなってきたので、気をお取り直して大通りの方へと向かった。そしてお菓子屋“丸藤”まえの少年啄木像を見つけたが、この近所にあるはずのもう一つの歌碑は、どうしても探し当てることができなかった。そこで甲子本店でおそばを食べることにした。そこで若い店員さんに地図を示しながら、天満宮までの道筋を訊いたら、ベテランの店員さんがわざわざ別の地図にマーカーペンで道順を書き込み、それを持ってやって来て事細かに教えてくれた。そして中津川沿いの江戸時代からの街並みも是非見た方が好いと教えてくれた。盛岡の人は、何と親切なことよと思いながら食事を済ませ、レジでお金を払う時に、“学生のころ 2 階の広間でコンパをやったことがある。”と話しかけてみた。すると、当時を知る人で、同じ場所で建て替えられたが３階は広間で、今でも宴会ができますよと答えてくれた。また一つ懐かしい思い出に触れることができた。

その後、午前中の悔しさを挽回しようと県庁通りの盛岡中学跡地の付近へと引き返し、地図を頼りに啄木の歌碑を探し廻った。そして岩手医大前で啄木の歌碑に出くわした。それは探し当てたというより、まさに歌碑に遭遇した感が強い。でも嬉しかった。それから地図でこの歌碑の場所を確認し、この近くにあるはずの歌碑を探して日赤裏あたりをさまよったが、とうとう見つからなかった。少し落胆して路地の角までくると、そこに“ひさご”と書かれた居酒屋があった。“ひさご”とは懐かしや、昔よく世話になった女将を思い出し、ドアを開けてみようかとも考えたが、時計を見て躊躇してしまった。また一つ思い出を引き出す回路のシナップスを刺激することができた。

それから県庁通りへ歩いて行くと裁判所前に石割り桜があった。この桜の樹齢は約 360 年と言われているから、壬生義士伝の吉村貫一郎もきっとこの桜を見て育ち、南部武士の魂が育まれたのかと思うと灌漑深いものがあった。しばらく行くと思い出深い公会堂があった。ここは昨夜も訪れたが、写真を撮れなかったので、改めて写真を撮りながら辺りを見て回った。

会いたかった歌碑を見つけることができなかったのは無念であるが、再び大通りに戻り、中の橋を渡り、古い町並みを見ながら上の橋まで歩いた。上の橋から中津川を眺め、遥か昔に思いを馳せた。そして、上の橋のたもとのわんこ蕎麦屋はどうなったのかなあと思ってふり向いてみたが、その看板は見当たらなかった。毎年秋になると行われる同袍寮恒例のマキ運び大会が終わって、お腹がすいたところで、ここのわんこ蕎麦を食べに来たのを覚えている。頑張って、部屋番号と同じ 46 杯食べた。今では見かけなくなってしまったマッチの軸で、食べた数を数えたものでした。

この上の橋から真っ直ぐに天満宮に向かい歩いて行ったが、途中で心配になり八百屋の主人に道を確認した。店先には松茸が沢山並んでいたので、帰りに買ってかえろうかなあと思った。天満宮のふもと近くまで来ると“城山南小学校創立 120 周年”の看板を目にした。たしか、在学中のアルバイトで教えていた子供の学芸会の写真を撮りにこの小学校へきたことなどを思い出しながら、天満宮に向かった。天満宮の登り口に着いた時には、足がかなり疲れていた。何しろ、家に居るときには、こんなに何時間も歩き続けることはなかったので・・・それでも今度は、啄木の歌碑と彼が好きだった狛犬さんに会えるのだと思い直して小道を登って行った。そしてとうとう丘の中腹に啄木の歌碑と盛岡所縁の俳人の句碑を見つけた。歌碑の前のベンチに腰を下ろし、辺りを眺めながら一休みした。丁度爽やかな秋風が吹いてきて気持ちよかった。そこから案内板に従って、工事現場の梯子の様な所を登って狛犬さんのいる境内に着いた。そこの鳥居の向こうに岩手山が遠くに見えた。狛犬さんの頭を撫でて帰ろうとしたところに口髭の立派な方がやって来て、社務所を締めますが宜しいかと聞いてきた。石段を降りながら考えたら、先ほどの方はどうも神主さんだったようだ。面構えは立派だが平服姿だったので気がつかなかった。天満宮の丘を下って帰り路を歩くのかと思ったら、急に気だるさを覚えて、タクシーの空車を探しながら歩き出した。そこから 300 メートルほど歩いた所で空車のタクシーが止まってくれたが、“今日は上がりだから申し訳ない”と言ってタクシー会社を教えてくれた。

わざわざ車を止めて教えてくれたのである。また一つ盛岡の良さを知らされたのであった。教わったタクシー会社へ行き下の橋まで送ってもらった。

その近所にある“啄木と牧水の友情の歌碑”を探すためである。

タクシーを降りて道路を渡った下の橋のたもとに“賢治清水”があった。喉が渇いていたので中津川のせせらぎを聞きながら、湧き出る清水をゴクリを飲んだ。しばらく下の橋の欄干と往来を眺めながら、牧水との友情の歌碑はどの辺りにあるかと辺りを見渡した。橋のたもとの案内板に“新渡戸稲造”の生家は橋を渡って 100 メートルとあったが、まずは啄木と牧水の歌碑を見つけようと川下に向かって川沿いに歩いた。自転車が通れる位の細い道を進んで行き川原橋までやって来た。この川原橋は吊り橋で自転車が渡れるほどの狭い橋である。この川原橋の近所を歩いてみたが、やはり歌碑は見当たらなかった。今度は、啄木と父一禎の歌碑を探そうと更に下って行き、とうとう北上川との合流付近の“御？橋”まだやって来てしまった。ここでも手がかりが掴めずくたびれてしまった。

時計も 15 時を廻ってきたので、あきらめて城跡に向かうことにした。

そこから川原橋まで引き返して、城跡の石垣を目指して路地を抜けて行くとカワトクデパートの横にたどり着いた。ここまで来るとお城の石垣が見えてきた。お城の石垣沿いに長い坂を登って行くと、花婿と花嫁が付き添いを伴って歩いてきたので、“おめげとうございます、お幸せに”と声をかけると、“ありがとうございます”と会釈してくれて、何だか清々しい気持ちになれた。

しばらく登るとお城の見晴の良いところに出た。そこから更にもう一段高い所まで登って、そこから啄木の歌碑を目指して歩いて行った。赤い欄干の小さな太鼓橋を渡って、少し下った所に啄木の歌碑があった。そこは丁度、市街地を見下ろせる位置にあった。

ここまで来ると疲れていて、お城の草に寝ころびたい気持ちであった。もはや、古稀となった今、十五の心に戻れる訳もないが、それでもこの歌碑の短歌（うた）が大好きである。時々この歌を口ずさみながら、遥か昔の少年のころの自分に立ち返って見るのも悪くないものである。啄木は没後 100 年経っているのに、彼の気持ちが私達の心の中に甦って来るのは不思議である。啄木の歌には決して

美辞麗句は詠み込まれてはいない･･･彼の素直な気持ちが平易な言葉で綴られているだけなのに･･･なぜか啄木がうたを詠んだ時の心境が伝わって来るのです。
　啄木は、一生お金に苦労し、嘘を言って借金もし、多くの方々に迷惑を掛けたらしいが、憎めない人だったようである。そんな人柄が歌に出ているのでしょうか。
　啄木の母親と啄木の葬式を出してあげた土岐善麿（哀果）は、「石川はえらかったな、と　おちつけば、しみじみと思うなり、今も。」と詠っている・・・

　　啄木の歌碑に別れを告げて、そろそろ帰ることにして歩き出した、すると石垣の下の方にバラ園と広場が見えてきた。この広場で大学祭の時にキャンプファイヤーをやったことを思い出した。その時の写真を見た篠原さんが、“キャンプファイヤーの薪を組み上げたのはワンゲル部だよ！”と言っていたのを思い出した。そしてユースホステスの小林（機械）さんが、石垣の上からワイヤーを張り、火の矢で点火する仕掛けを作ったと言っていたことなども思い出した。こうしてそれぞれが何らかの形で大学祭に関わっていたことを想うと懐かしいかぎりである。
　城跡を下ったら桜山神社の横に出た。旅の締めくくりに桜山神社に参拝してから、タクシーに乗って盛岡駅に向かった。タクシーの運転手さんから盛岡の変貌ぶりの話を聞きながら駅についたが、私にとっての盛岡は、いくら変貌してもやはり“もりおか”なのである。

　こうして盛岡の旅は終わった。新幹線の中で探し当たらなかった歌碑に関する資料を注意深く読んでみると、歌碑の場所が明確に記載されていたのだ。予め資料に目を通しておけば良かったと、悔いる気持ちと一方では、また盛岡にやってくる理由ができたとほっとしている自分も居た。
また、盛岡におじゃました時には、女鹿さんはじめ在住のみなさん、宜しくお願いいたします。

（　平成 25 年 9 月 26 日　小南　記　）

＜追記＞
　最近、めっきり記憶する機能が衰えたようで、先週の今日は何をしたのか手帳を見ないと思い出せないことが多くなってきた。その手帳も使わなくなったので、思い出す術が無くなってしまった。
そんな訳で、折角の旅なのでそのメモを残しておこうと書き始めたら、ずいぶんと長くなってしまった。これを読んでくださった方、前半の備忘録短歌を読んでいただいた方で何かご批評でもコメントでも結構ですから、お便りをいただければ大いなる幸せです。宜しくお願いいたします。